



学校法人
鎌倉女子大学

女性と文化

今年度から、大学の教養系の科目群の中に「女性と文化」という新しい授業が設定されました。この授業の内容が、「シラバス（講義要項）」の中には、こう謳われています。

「日本文化の基底に『女性』性があると言われるが、『女性』性がいかなる意味・役割を担ってきたのかを、日本の思想・文化の歴史、また諸外国との比較のうちに考える。一、日本文化において、女性の担ってきた意味・役割を理解する。二、日本文化において、女性がどうとらえられ、描かれてきたかを理解する。三、女性と教育・死生・家族・仕事など、諸外国との比較のうちに理解する」。

授業の形式は、日本倫理思想史、日本文学、比較文化論、宗教社会学、死生学と、それぞれ専門を異にする教授陣が持ち回りで担当するオムニバス。

まず歴史学的視点から、「日本文化と女性」をテーマに、イザナギ、イザナミ、アマテラスなどを素材としながら考える古代・神話篇、源氏物語などを素材としながら考える中世・王朝篇、近松浄瑠璃などを素材としながら考える近世・江戸篇、与謝野晶子などを素材としながら考える近代・明治・大正篇、向田邦子などを素材としながら考える現代・昭和・平成篇が。

こうした過去への洞察を踏まえた後、^{ふる}故きを^{たず}温ねて新しきを知る、次に宗教学・社会的視点から、現代的問題意識を基調としながら、「女性と生死」、「女性と家族」、「女性と仕事」をテーマに、女性が人生や教育や労働とどう向き合ってきたか、また向き合っていくかといった問題が。

比較文化論的視点から、米国を初め欧州諸国との、女性と文化をめぐる、我が国の傾向との相違や対比といった国際比較が。

少しユニークな視点から、説話や能楽、また昨今の歌謡曲などを素材としながら、「男は女をどう見てきたか」、「女は男をどう見てきたか」といった日本人の心情の底に流れている男女の関係性が。

シラバスには、評論家の鶴見俊輔氏の面白い言葉が紹介されていました。昭和20年8月15日、「敗戦当夜、食事をする気力もなくなった男性は多くいた。しかし夕食をととのえない女性がいただろうか。他の日と同じく、女性は食事をととのえた」。この発言を我が家で口にしたところ、家内が即座に「当然よ」と反応しましたが、それは、どこか観念によって自分を支えようとする男にはない、しっかりと生活の中に身を降ろした女の人の^{かま}構えと^み見て取ることも出来るのかも知れません。

そして最後は、担当者全員によるパネルディスカッション「女性と文化を対話する」が。

このようなさまざまな方向から重ねられた議論を通じて、「文化創造の主体としての女性」

の存在や活動を見とどけようという、女子大学ならではの講座とっていいでしょう。

安倍内閣の「成長戦略」の一環として、内閣府が取りまとめた「我が国の若者・女性活躍推進のための提言」でも、こう強調されています。「成長戦略の中核として『女性』を位置付け、女性の中に眠る高い能力を十二分に開化させ、その力を発揮していくことが、我が国の経済社会や地域社会の再生・活性化に大きく貢献すると期待される」。

そこで私の感想ですが、この授業においても提言においても求められているものは、あくまでも「女性の中にある可能性」を問うことにあるのであって、女性の女性性を捨て去って、男性と等質の性として生きることを勧める古い近代主義的なジェンダー論ではどうもなさそうです。人間が具体的に抱えもつ諸要素を振り落とし、無色透明の蒸留されたoneと見る近代の模範的な人間観が、その実体もよく理解されないまま、未だに普遍化されることが多いわけですが、それでは不勉強の誹りは^{そし}免れず、^{まぬが}これからの多様化した時代は、こうした前世紀的な発想ではとても乗り切れそうもありません。

エドモンド・バーク以来、ジョン・アクトンに連なるイギリスの良質な自由主義の伝統を継承するフリードリヒ・フォン・ハイエクは、人間というものを、次のように捉えるべきものだといっています。人間は、社会の中に存在することによって初めて自分の本質も性格も定められる存在であり、現実の人間が抱えもつこうした諸要素を歴史のスリコミと称して、エシャロットの皮でもむくように剥奪していけば、人間などはどこかに雲散霧消してしまうことだろうと。水を蒸留して[※]いけば、やがては気化し、消えて無くなってしまいますが、人間も変わりはないということです。

※参照 ハイエク著『個人主義と経済秩序』（全集／第三巻） 嘉治元郎・嘉治佐代訳 春秋社

[>前のページへ戻る](#)